

DOLL FORUM JAPAN

DOLL FORUM JAPAN

ドール・フォーラム・ジャパン

MAY 1996 Vol.9



人形制作 藤井路以

■中西京子とやまと鳳

7/25~8/16 京王プラザホテル開業25周年記念展示

「江戸時代の芝居小屋」など約600体

於 東京新宿京王プラザホテルロビー

7/19~10/13 世界炎の博覧会・三県交流館 人形ジオラマ展示

佐賀県有田市会場・三県交流館

*福岡・佐賀・長崎三県の合同博覧会に、「トンテントン祭り」など各県の6つの情景を150坪の会場に約1000体の人形でジオラマ構成する

5/18~11/3 アメリカ・サンタバーバーバラ美術館

「遊びのアート・人形と玩具・過去と現在」展

*中西京子作「羽衣」が招待出品

GALLERY ギャラリー

■せ・ら〜る

東京都渋谷区千駄ヶ谷3-52-3 黒川ビル3F

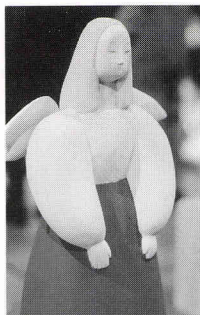
TEL 03-3478-5230 午後12時~8時無休

5/21~5/30 味岡延博人形展(市松人形)

6/1~6/9 大森小夜人形展(木彫)*写真

7/9~7/14 相馬宏充・翔野幸知二人展(イラスト・人形)

9/1~9/8 水無川リナ人形展



■昔人形館青山ギャラリーK1

京都市北区北大路町室町南入ル小山東大野町

69番地

TEL 075-415-1477 午後1時~7時無休

創作人形アピールボックス

5/1~7/31 柴倉一二三・後藤久子・太山レミ



不思議な生き物たちとともに広げられる小さなリュウの冒険ファンタジー。使われる人形はどれも山本が長い時間をかけて構想、改良を重ねたもので、その自然で細やかな動き、浮遊感覚は、新しい人形劇として多くの親や子供にみてもらいたい。

EVENT

ストリート・アート・エキシビション#2

5/25~6/2 11:00~19:00

大阪心斎橋ソニータワー9F FM802(大阪)で公募したストリート・アーティスト・オーディションに通過したアーティストの展示・パフォーマンス。7号で紹介したポエティ・パーティも出展、音に反応して動くヌグミーなど「電動ヌグミー」を展示する。

主催 FM802 問い合わせ: 06-354-8020

DFJ写真展 小林美枝子

5月14日から1ヶ月間 於アテネフランセ

東京都千代田区神田駿河台2-11 10:00~20:30

TEL 03-3291-3391 *以後山田富子、大槻和子を予定

DOLL FORUM JAPAN

MAY 1996 VOL.9

CONTENTS

表紙 人形制作 藤井路以

インフォメーション・スケジュール 2

近況報告 浜いさを 4

REVIEW 展覧会より 5

武井久美子、くら田たまえ(ギャラリー旬、松屋銀座)、加藤弘子、石塚亜希子、松本昌子、山上真智子+BEE、稲辺智津子、渡辺萌、三人のおもちゃ箱、島村龍児、浜いさを、小林美枝子

教室展: 菊池恵美子人形教室展、エコール・ド・シモン展、ピグマリオン人形教室展

特別レポート デミ・ムーアの来日 9

カバーインタビュー 藤井路以 10

連載 ゲイルからの手紙 「何でもあり、すべてOK」

文 ゲイル・エニド・ジマー 14

連載 人形気分 「岩本さんの話」 15

文 青山恵一

特別レポート ドールパーティ・イン・カンサイ 16

特別レポート 「ひとがた・カラクリ・ロボット展」 17

東京都品川区O美術館

連載 人形つれづれ 文 福島弘太郎 18

連載 お化け屋敷店長日記 文・絵 摩宮ピノン 19

「嵐の中でキラキラ光る」

行けなくて残念(DM紹介) 19

特別レポート 「サンタフェ・ドールアート」 20

from overseas イヴオンヌ・フリプシ(オランダ) 21

LETTERS 投稿 22

編集後記 23

ドール・フォーラム・ジャパン 9号

1996年5月24日発行

ドール・フォーラム・ジャパン事務局発行

ドール・フォーラム・ジャパンは、日本のドールアートを支援するためにつくられた情報誌で、購読会費とユーラシア・ドールズのサポートにより運営されています。

SCHEDULE & INFORMATION

スケジュール

■創作人形展 夢のつばさ (写真)

木村宏美と仲間たち

5/28~6/2

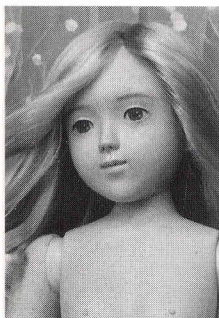
10:00~18:00 (最終16時)

クラフト&ギャラリー幹 2F

岡山県倉敷市中央 1-6-8

TEL 086-422-7406

倉敷美観地区の大原美術館角入る100m右側 着せ替え抱き人形・市松など80体あまりを展示



■大槻和子個展「ほほえみⅣ」

(写真) 6/3~6/9

ギャラリー大江

中央区銀座 6-9-16 ロシェビル 1F TEL

03-3571-6480



■昔人形コレクション博多展

6/15~17 10:00~18:00

警固(けご)神社

福岡市中央区天神 2-2-20

TEL 092-771-8551

併催 創作人形アピールボックス 中島博子・蓮尾恵・安原吟子

縮緬細工 末次由美子・轟すず

人形とワインとおしゃべりのタベ

6/16(日) 18:00~ 香りとミニ・ピアノライブ by 山本有子

3

インフォメーション

FILM 映画

ストリート・オブ・

クロコダイル

(ニュープリントによるリバイバル上映)

他3作品同時上映 全75分 監督

ブラザーズ・クエイ

6/1~6/28 連日午後9時より

レイト・ロードショー

ユーススペース2 (渋谷駅南口下車2分 JTB 前さくら通り上る)

TEL 03-3461-0211 大人1500円 学生1200円 前売1300円

煤け、所々壁のはがれた廃墟のような建物の立ち並ぶ薄暗い町…「大鰐通り」(ストリート・オブ・クロコダイル)に迷い込んだ一人の男は、寂れた人形館に足を踏み入れる。そこで男は踊る釘や内蔵を持つ時計、頭に電球をつけた少年といった怪奇で幻想的な出来事を目撃し、やがては自分自身も巻き込まれていく。公開と同時にカルト・ムービーの最高峰として世界的に高い評価を得た代表作「ストリート・オブ・クロコダイル」を始め、どの作品も怪物的でグロテスクな造形をした人形たちが登場するが、それが逆に悪趣味寸前の退廃的な美しさを醸し出している。はっきりとしたストーリー仕立てではなく、テーマに沿ってパフォーマンスが続くといった内容なので、難しく考え込むことなく人形たちの繰り広げる幻想美の世界を満喫できるだろう。クエイ兄弟はロンドンの王立美術学校出身の一卵性双生児。アート映画、舞台美術の世界ではかなり有名な存在である。(小磯洋)

*同劇場では昼間はクエイ兄弟の第1回長編劇映画「ベンヤメンタ学院」を上映。



■世界の人形展 (写真)

アンティークドールから現代創作人形まで
6/24~6/29

東京日本橋区善 4階ギャラリー

*アンティークドール、海外レプリカに加え創作人形も出品。海外ではダイアナ・エフナー、イングリッド・ウインター、国内からは三輪輝子、福島弘太郎、小林美枝子、若月まり子、滝康子が出品。他にスペイン、イタリア製磁器人形など。



■抱き人形二人展

7/11~7/16

丸井今井札幌店 札幌市中央区南一条西2丁目

丸井今井大通り館 8F アートサロン

TEL 011-205-1151

市松人形師 藤村明光 創作人形 長谷川裕子が出品

■秋への風 人形展 (写真)

8/1~8/6 10:00~19:30

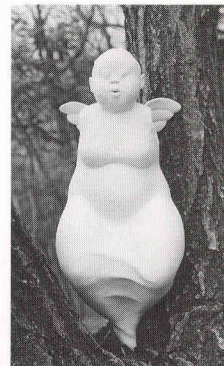
(日曜7時迄・最終4時迄)

ブランタン銀座 5F 読売サロン

東京都中央区銀座 3-2-1

TEL 03-3567-0077

秋の森をテーマとした会場に、所由紀子、高橋操など26名の作品を展示

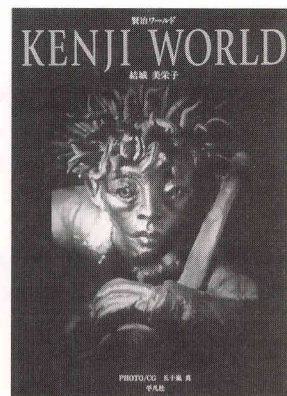


BOOK

賢治ワールド 結城美栄子作品集

平凡社 2800円

4月24日に発売された陶人形でユニークな創作を発表し続ける女優・陶芸作家の結城美栄子の作品集。今年で生誕100年を迎える宮沢賢治の銀河鉄道の夜、セロ弾きのゴーシュ、注文の多い料理店などをテーマに制作された100点の作品では、作者の自由奔放な感性が存分に発揮されている。五十嵐真の写真・CGで魅力的に演出され、一冊の絵詩集としても楽しめる要素がある。128頁全カラー。



THEATER 人形劇

リュウのオールド

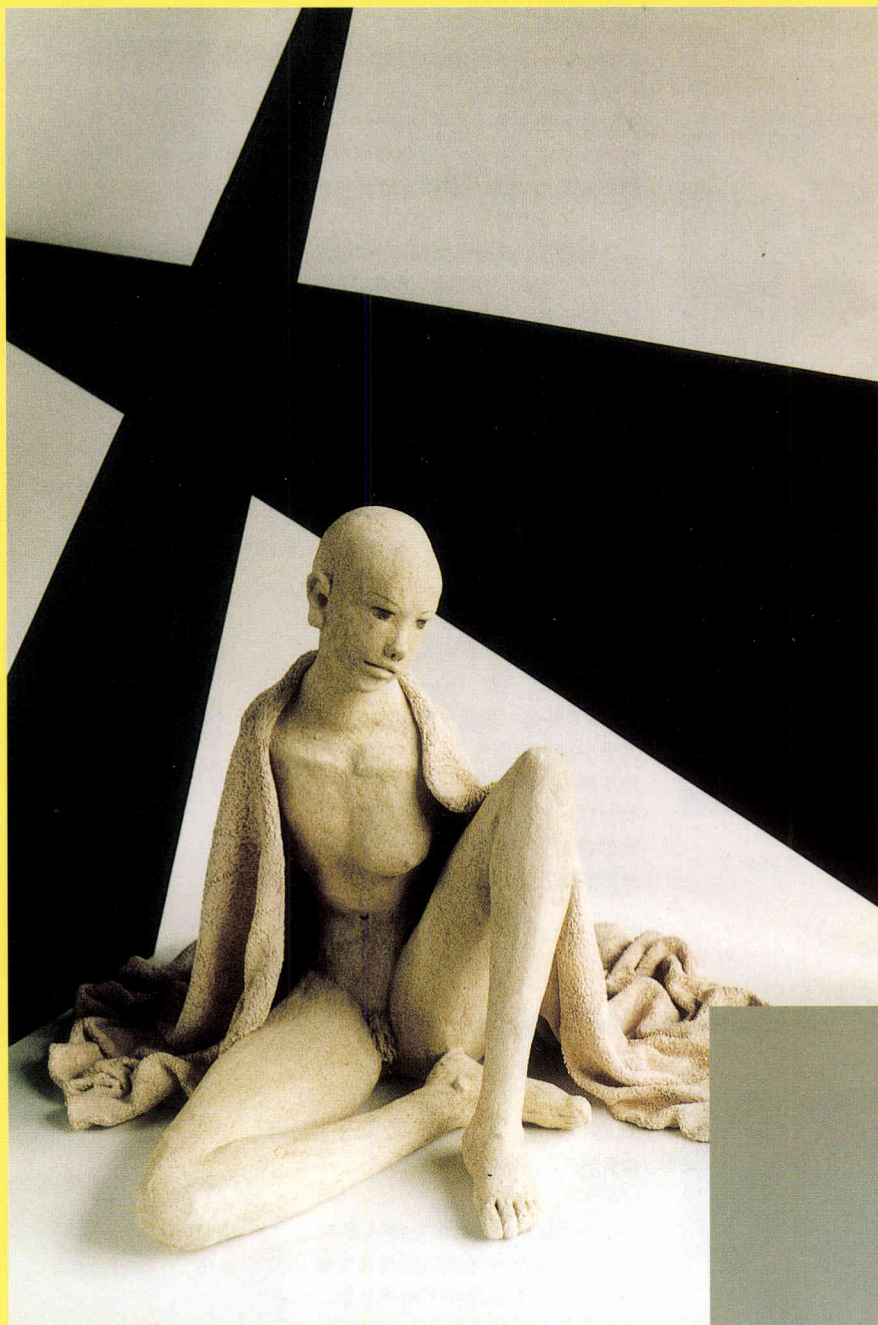
6/10 18:30, 6/11 15:30

ヴァンテホール 渋谷区千駄ヶ谷 4-6-15

TEL 03-3796-2486 前売・当日共2000円 ペア3800円

主催・問合 人形芝居かわせみ座 03-3338-4205

大人にも楽しんでもらえる舞台づくりをめざす人形師山本由也(ヨシヤ・ヤマモト)の率いるかわせみ座の公演。円形舞台の上で森の



浜いさを

この4月に、浜いさを氏はストライプハウス美術館で恒例の個展を終了した。今回はされこうべを主なるモチーフとし、氏独特の白い陽炎のような形と黒い鋭角の三角形との組み合わせで、「存在証明」のテーマに迫った。来年は紀ノ国屋画廊での個展が控えている。芸術新聞社よりエッセイ集「人形のモノローグ」(仮題)も出版予定

作品の素材は桐塑。40cm から 120 c m大。



REVIEW 展覧会より



写真左上：小林美枝子 中：くら田たまえ（金太郎元氣 桃太郎勇気） 下：稲辺智津子 右下：天田和子（菊池恵美子人形教室展）

武井久美子人形展

ドリーム・ダイアリー

一月二十五日～二月三日

ギャラリアアメリカ

円錐の頂点に椅子の足を一本のせ、そのまた椅子の背のてつべんに片足でバランスを取るサーカスの曲芸師。武井久美子さんが表現する曲芸師たちはいつもそんな極限の状態にある。だがその描写はあくまで静かで、時を止め緊迫感を取り除かれれば、その不安定な形のみが目の前に存在するのみだ。胡粉で仕上げるトーンを抑えた上品な色調が、作者の生み出す不思議な浮遊空間の演出に欠かせないのはいうまでもない。その他、玉乗りをする曲芸師や、新作のドリーム・ダイアリー（写真八頁）をみても、何か深い思索に誘惑されそうな魅力的で不思議な光景である。

加藤弘子人形展

一月三十日～二月五日

ギャラリアドゥシヤルム

中央に配した赤い着物の少女の生き人形が印象的である。今は写実的な関節人形に興味があるという加藤弘子さんにとって、今回は遅すぎたのではと思える初個展。菊池恵美子、吉田良一などに師事したこともあり、作者のたどった道のりを象徴するように、バックキングの中国風な人形から東西の関節の抱き人形、文楽人形まで着実にこなし、制作への真摯な

取り組みぶりが伺える。テーマを絞って自己の持ち味を確認すれば、更なる飛躍が期待できそうである。

石塚亜希子人形展

二月十三日～二十一日

せ・ら・る



テーマとする松本昌子さんの作品三十体あまりの展覧会が、今年もおかりやで開催された。瞑想するポーズに日本やアフリカの様々な布きれを巻き付け、それにアクセサリーをほどこし一体一体組み合わせの妙を楽しませてくれるのは、松本さんのスタイルとして定着している。ケニア人の音楽演奏家であるご主人の国のものであるうか、前回と同様民族的なクロスや小物を使ったディスプレイはより洗練され、音楽的な方向性が強くなったような気がする。

ファンタジア

山上真智子+BEE

二月二十五日～三月二日

ピガ原宿画廊

原宿の古びた同潤会アパートの一角を改装したギャラリーのどこか懐かしい空間に、故天野可澄の人形教室の生徒であった山上真智子さんとBEE二人のシニールな作品は、静かにとけ込んでいた。入口を入ってすぐにあるベルメールを意識した

稲邊智津子人形展

三月十二日～十六日

サエグサ画廊

意欲的に発表を続ける稲邊智津子さんは、子供の表情の表現では円熟の域に確実に達しつつある印象である。白いワンピースの幼い少女が一人でボタンをはめたり靴を履こうとする海外でも高い評価を得た「巣立つシリーズ」の向かいには、対称的に藍染のワンピースでさわやかな印象の「風物語」シリーズが展示された。今回の作品展は花をテーマにしており、会場も生けられた色とりどりの花が演出の重要な役割を果たしている。花にちなんだタイトルの付けられた着物姿の子供たちは、胡粉仕上げで、「懐かしさだけではなく、こわいものが何もない、きかん気のある子供を感じとってもらいたい」という作者の言葉通り、子供の生き生きとした表現に成功している。

渡邊萌人形展

少女の記憶

三月十七日～二十四日

せ・ら・る

武蔵野美術大学で日本画を専攻し、吉田良一氏に師事した渡邊萌さんにとって初個展。関節人形など十二点あまりを展示。日本画の制作に伸び悩んでいた渡邊さんは、吉田氏に出会って人形作りに開眼。それ以前も胡粉で市松人形を作っていたが、リアルな表情の関節人形を作るようになる。この間、二人の子供に恵まれたが、子供を生む前と後では作りたいものが変わったそう。会場中央には、最初のお子さん「ちあき」ちゃんを模した嬰兒の人形が、実際に着用したベビー服を着て箆の中に目を見開いて天井を見ています。そこから立ち登る微かだが確かな体温のようなものが、この作者の特徴ではないだろうか。他にも旧作のシルビア、バックなど、既にこの作者と特定できる表情があるが、その微かな体温のようなものは共通である。

くら田たまえ展

笑門来福

一月二十四日～二月四日

ギャラリア旬（東京・広尾）

正月にちなみ、十センチ大の縮緬のぬいぐるみの鬼やお多福、招き猫などめでたく楽しそうな小さな世界が、ギャラリア旬の洗練された和風空間のそこそこに繰り広げられている。雖



松本昌子人形展

（写真八頁）

二月十五日～二二日

ギャラリアおかりや

アフリカと日本、果てはそこにとどまらぬ「融合」を



三人のおもちゃ箱

(石橋まり子・山本純子・波田亮)
三月二十日〜三月二十五日
銀座芝山画廊

山本さんの昭和三十年代のノスタルジー、波田さんの凛とした表情の美少女、石橋さんのお茶目でおしゃれ、と三つの個性が調和した楽しい展覧会である。

仕事をしながらエコール・ド・シモンで人形制作を学んで五年から十年という三人は、このはじめての展覧会の準備のために二年をかけた。たぶん、その二年の間に三人は相手との違いを知り、認めることでそれぞれの方向性をより確認できたのだろう、この展覧会を経てそれぞれが表現したいものを見つけたことが出来たようである。ただ、

展示は机で分けて壁面に沿って飾るのではなく、もう少し工夫されたらそれぞれの魅力はもっと光ったのではないだろうか。

くら田たまえ人形展

(写真五頁)

金太郎元氣 桃太郎元氣
四月十六日〜四月二十九日
松屋銀座7階遊びのギャラリー

五月の節句にちなんでのくら田たまえの元氣あふれる作品展。十五センチから二十五センチくらいか、約四十五体の古布や縮緬でつくられた桃太郎や金太郎が小さな会場にひしめきあっている。いつもながらどれ一つとして同じ顔はなく、金太郎、桃太郎という二大キャラクターを利用して作者が呼び起こせるだけの面白少年の様々なシーンを再現したような印象である。気合を入れたり、おどけていたり、おやつをほおばっていたり、これらのにぎやかな金太郎や桃太郎を見ていると作っていたときの作者の一人笑いが聞こえてきそうである。会場には作者のテーマにちなんだ墨絵も同時に展示された。

小林美枝子の人形展

(写真五頁)

四月二十五日〜五月二日
竹取物語(東京・目白)

竹取物語の企画による二十回目的かぐや姫の会は、小林美枝子さんの個展。小林さんの出品した十二点は、いつものように世界の少年少女文学の登場人物を思わせるような詩情ある作品。手芸をしたり思い思いに遊ぶ「私の好きな時間」シリーズや、「道化見習い」シリーズ、他に「靴のひもを結び娘」「少年」など。それぞれの設定や衣装、ポーズが異なり、目を惹きつけてくれるが、顔の表情の変化に乏しいのが少し気になる。この独特な愛いを感じさせる顔が小林ドールの大きな特徴でもあるのだが、「少年」や「マギー・ピンの旅立ち」に見られる素朴さ、ポピンレースを編む少女の華やかさや細やかさを軸に、次にはこれらの少年少女の違う局面を見てみたい気がする。作品は二十〜三十センチ大、バックキングでつくられている。

教室展

菊池恵美子人形教室展

(写真五頁)

三月六日〜十一日
司画廊(東京国分寺)

写実的なバックキングのポーズ人形を指導する菊池恵美子さんの人形教室展の出品者には、十人が出品、三十センチ前後の小さな世界の中で、ノスタルジックであったり、西洋文学を連想させるような情景を個性的に表現している。レベルの高さを感じさせる作品も少なくなかった。講師である菊池さんは、今

回宗教的なテーマを意識した東洋の子供たちの新作のシリーズを中心に作品を出品。粘土が主流の創作人形展の中で、この教室から作家が果立ち、それぞれに活躍してくれることを期待したい。写真(五頁)は天田和子さんの作品。

エコール・ド・シモン人形展
三月七日〜三月十二日
紀ノ国屋画廊

毎年恒例で「文化祭」のようなもの、といわれるエコール・ド・シモン展には生徒・出身者を含め五九名がひとり二〜三体を出品、総じて九十体あまりが展示され、色鮮やかでにぎやかな印象の教室展となった。可愛い、美しい人形という基本コンセプトの上で、それぞれのアト性を展開している。それらの思いはデザインやコスチュームに反映されているものが多く、作り手のセンスのよさが感じられる。師である四谷シモン氏に追隨する勢いの意欲作もある。写真は、古城愛子さんの作品。

ピグマリオン人形展

四月二日〜十四日
せ・らくら

吉田良一氏率いるピグマリオン



ンの教室展には個展経験者も含め三十八名が参加、講師の吉田氏、福島太郎氏も近作を出品した。会場では講習日より展示を前期・後期に分け、約二週間の展示となった。関節人形が中心だが、同教室でよく見られるシニールなインパクトをねらう作品の中で、固定ポーズや布張りの作品も見られ、テーマも様々で幅の広がった印象がある。写真は田中さつきさんの作品で、これが制作一作品目だそうである。



島村龍児人形&フォト絵展

(写真八頁)

四月二日〜七日
すぺーす小倉屋

前回の教室展同様、島村氏は東京・谷中の町中にある古い蔵を改装した趣のあるギャラリーを個展の会場に選んだ。明治・大正・昭和初期の優美な女性や市松人形を得意とする氏の作風には、びつたりとした雰囲気である。展示作品には精力的な制作ぶりが伺える。

者の今後の方向を象徴する意欲的な実験作の展示があった。中央に対称をなして展示されている和洋の裸体の女性像は、一体は「たまゆら」と題された女性像(写真八頁)で日本画的で、作者の女性の理想像でもあるという。珍しかったのは、「ラ・ボエーム」と題された西洋の女性像で、作者の作品としては珍しく描写がリアルで、化粧も濃い。島村氏は女性のエロティシズムをひとつの表現方法にこだわらずに表現し続けたと語る。他にこの部屋では皮を張った男性のトルソなどがあり、背中には日本的にアレンジした聖セバスチアンの殉教の図が大胆に描かれている。また会場全体に、氏の新しい表現方法として、写真に独自の方法で彩色を施し絵画的に仕上げたフォト絵が展示された。

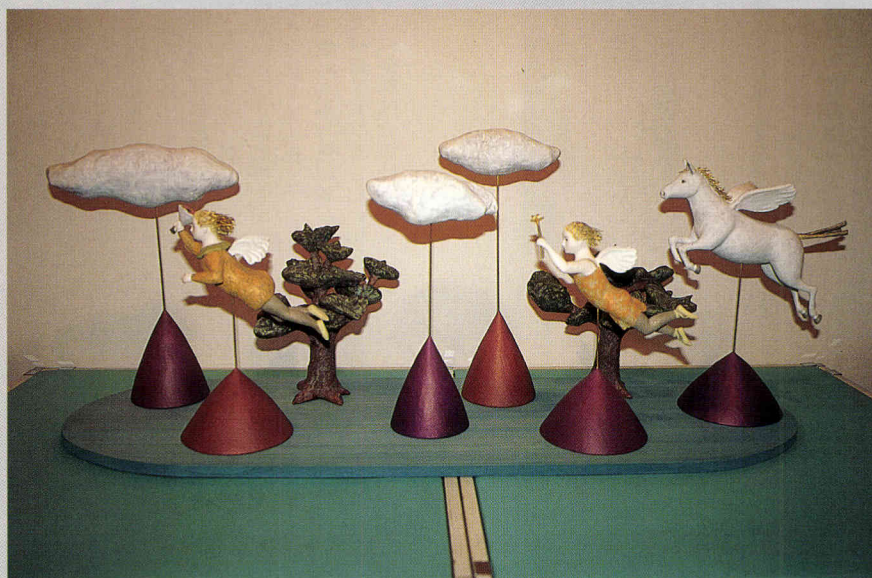
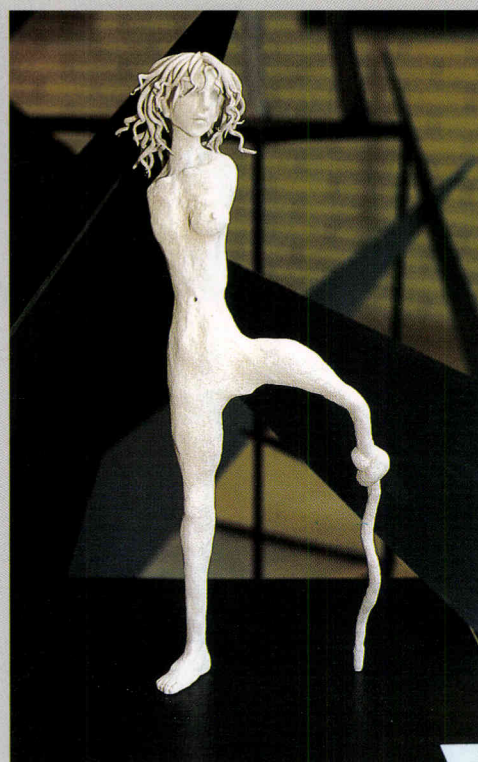
浜いさを展

四月五日〜四月二十九日
ストライプハウス美術館
ストライプハウス美術館

浜氏の個展は三年ごとに開催され、今年では四回目である。三階から地下までの四フロアにわたる、氏の約四十体からなる白一色の人形群が、まわりに配された黒い鋭利な三角形と対象をなす。白と黒に象徴されるものは生と死、有と無なのである。今回のテーマは「存在証明」。砂漠を旅しているようなイメージの作品群のなかで、最上階の中央にはされこうべを高く

く掲げたテーマと同じタイトルの作品がある。地から生えのびたような肉体を連想させるフォルムや、デフォルメされた体でそり立つ人形は、氏の表現としてなじみが深い。すわり込み対話をイメージした作品群が今回では新しい表現だという。同会場の展示では氏はいつも思いきったインスタレーションによる表現を展開してきた。これまでに、日常を封鎖する意味で会場の器具・設備を梱包したり、冷蔵庫や自転車黒塗りにして配置したりしたこともあったという。メッセーj性を強調する氏の作品は、そのような大胆な構図を求めるのだろう。それらを見るチャンスを通じて、今回の表現を氏の表現活動の流れの一貫として捉えることができる。筆者は残念な思いである。

(取材・文は全て小川千恵子)



写真右上：浜いさを、 右中：松本昌子、左中：島村龍児、 左下：武井久美子

DEMI VISITS JAPAN

デミ・ムーアの来日

文・小川千恵子



ヒンクル氏(左)と熱心に作品を鑑賞するデミ・ムーア



左よりヒンクル氏・筆者・デミ・ムーア

「ゴースト・ニューヨークの幻」「スカーレット・レター」などで主演を演じたハリウッドの個性派女優デミ・ムーアが1月に来日した。彼女の現代人形に関する情熱は有名で、本誌でも紹介した大島和代さんの主なる作品も彼女のコレクションに収まっている。彼女は、約1年半後に現代人形美術館をアイダホ州に開館する予定だ。数年前に夫君(ブルース・ウィリス氏)がパリで彼女へのおみやげとして買ったミトラニの人形がきっかけで収集を始めたそうだが、今や趣味の範疇を越えドールアート界のバトロンと呼んでもよいほどの理解と情熱をもって、ドールアートの振興に貢献している。

電話は、まさに私がサーニットの講習会にでかけんと、いつもながら櫛で髪をとかしながら玄関に向かうときに、鳴った。デミのアシスタントであり、現代人形美術館の主任学芸員となるヒンクル氏である。名前は知っていたが、話すのは初めてである。彼は、来週日本に行くから、作家の人形を見たいという。デミとヒンクル氏は毎月ドール・フォーラム・ジャパンを熱心に見ており、自分たちの方向性と一致していると、内容を高く評価しての相談だった。欧米のドールアート界では、デミのコレクションとして購入してもらえることがステイタスとなっており、多くの作家やディーラーが接触したがっていることを考えれば、知らぬ間に私のアメリカでのスライドの発表やDFJを見ていて会いたいと言って下さることは本当に荣誉であり、夢のようなことだった。

彼らが横浜の人形の家、与男輝館を回った翌1月23日、私は第一線で活躍中の新人やベテラン作家の何人かの方に声をかけ都内のホテルで面会をすることになった。彼らは私たちのためにスケジュールを一日とるという歓迎ぶりだった。前号にも書いたが、通された部屋に今まで私が送ったドール・フォーラム・ジャパンと、私が書いた「日本のドールアート」という記事のある出たばかりのドールリーダーがきちんと並べられているのを見て、どんなに嬉しかったかは、一緒にドール・フォーラム・ジャパンを育てて下さった読者の方にもおわかりだと思う。

間近に見たハリウッドの大女優は、飾り気もなく気取りもせず、気さくに話しかけてきた。私たちは人形を目の前にすぐに共通の話題で打ち解けてしまった。デミは一体一体、作品まで視線を落とし、注視しながら新人・ベテランを問わずすべての作家に熱心に質問をし説明を聞き、感想を述べていく。彼女が作品をほめる言葉の中に「パワーがある」というのが多いのが印象的だった。観賞後、彼女は建設中の人形美術館に日本のセクションを設ける考えを明らかにし、一同はその誠意と理解の深さに、驚きに近い感銘を覚えた。

「大人が鑑賞できる人形のアートがあるんだってことを、もっと多くの人に認識してもらわなければ」と熱弁を振るうデミとヒンクル氏は、私を見ると、「ああ！チエコはよく分かっているはずよ！言う必要はないわ！」と言って笑いあった。偶然だが互いに異境で違う時間を過ごししながら、同じ事を考え行動する同士のような連帯感を、その時確かに感じた。

デミは、帰国してからも撮影の合間に相変わらずパワフルに活動しているようである。2月にはエイズ基金のためのファッションドールのチャリティー・オークションのホステスを務め、4月には2年前に惜しまれながら亡くなった人形作家ロバート・マッキンリーを記念する賞を受賞した。今まではうわさの奥の存在だった彼女がドール・シーンの前面に華やかに登場することで、この世界が活気づくことを喜ぶ作家やファンは多いだろう。



左より：岡田好永、所由紀子、黒沢昌子、杉田明利、高橋操、滝康子、ヒンクル、小川、デミ・ムーア、高橋登美子、中西弘光、中西京子、吉田良一、三輪輝子、ポエティパーティ和田(ユウラシア・ドールズ)

敬称略

カバーインタビュー

写真の作品は、最近19年の寿命を全うした愛猫ワンワンのためにつくられたもの。
にぎやかに、楽しいパレードが、天国に上るワンワンのお供である。

藤井路以

インタビュー・文 小川千恵子

テレビ番組のポンキッキ（フジTV）、NHKの人形劇「ピコピコボン」、「マホマホだいぼうけん」「川辺のなかまたち」などの人形美術を担当し、人形作家として大活躍された藤井路以さん。謙虚な言葉の中に、現場の厳しさを細やかな神経と誠意で乗り越えてきたプロの風格を感じる。今は作品を作ることに時間をかけたいという路以さんに、教室展の準備であわただしい中お話をうかがうことができた。



人形劇とのかかわり

■ 昨年までは、路以さんは「マホマホ大冒険」や「川辺の仲間たち」など、NHKの人形劇のお仕事で活躍でしたね。現場での苦労も大変だったんじゃないですか？

藤井 ちょうどNHKの人形劇というものがどんどん端っこに追いやられていって、このスピーディーな時代に、鉄の棒で画面を遮るような世界を何で意図的に残そうとするんだという反対派の方の意見とかが渦巻いて大変だったのです。私は、人形劇のいいところばかりを固持して声を大にして残したいというわけではないのです。やはり機械やコンピュータが発達していけば、やれることも無限に広がってくると思うんです。でも、そうでない荒削りだけど手で触った温かさのようなものを、がんばって残していかなければ本当になくなっちゃうんだな、と思ったから、子供の時に見ていた人形劇の断片的なシーンが頭にぐるぐる思い出されてきて、悲しくなっちゃってね、せめてこういう表現がまだあるんですよって見ていただく機会というのを、たかだか週に十五分でも、大げさですけど守れるんだたらけんかしてまで、と思っていた時期だったんですよ。

■ もともとNHKのお話があるまでは人形劇をやってみようという関心はあったのですか？

藤井 人形劇との関わりは、サ

ンリオの制作した人形劇映画「くるみ割り人形」のパイロット版なんです。その時友永詔三さんが人形を作り、私が衣装を担当したのですが、監督をしていただいたのが清水浩二さんというひとみ座という人形劇団をつくられた演出家だったんです。その清水さんにスカウトされて、「人形の家」という清水さんの新しい人形劇団で、私は人形のデザイナーだけでなく、舞台美術の方とかをやりながら、映像でなく、生で人形劇を見ていただくという仕込みに参加させていた

だいたったんです。それから千葉テレビの人形劇の仕事をするようになったのですが、その頃はまだ人形を作っていました。確か三回目の絵の個展をアメリカさんで開かせていたでいてるときに、フジテレビのプロデューサーがいらして、その日にスカウトされてポンキッキをやるようになったんです。またそのポンキッキの作品を見てNHKの方が呼んでくださることになって、NHKのお仕事をやることになったので、それ以前には地味ですけど、十何年か人形劇のお仕事に美術家という立場で携わっていたんです。

■ まったく人形と縁がなかったわけじゃなくて、きつかけは人形劇だったというわけですね。

藤井 またその頃は、そばに熱心な本場の傀儡師という方がいらしたんですね。人形の目がスライドして動いたり、開閉、逆

転、動物によっては違う耳の動きをしたり色々なからくりがあつて、素人がちよつと分かるようになったからつて作れるようなものではないんです。だからよけいに自分はデザイナーをするべき人間であつて、作る人だとは思つてもいかなかったのです。たまたま絵の個展の時に、空いた空間に立体物を飾ってみたらと勧められて、子供が油土でつくったような、とてもなかくひどいものをおもしろがつて並べさせてもらったときに、西武デパートの企画の方が第一回創作人形展に出して見ませんか

と声をかけてくださったんです。その時は私は人形を作る人間じゃないからと、断つたんですが、吉田良一さんが「イラストを描く人間が作った人形だつて表現の一部で面白いから出しなよ」といつてくれたので、ちよつと勇気がわいて二回目から参加させてもらい、気がついてたら人形を作る人という部分が少し自分の中に備わつていったというのが一番素直かな？

■ 一番最初に作ったのは？

藤井 動物です、全部。ライオンとか、猫もそう、うさぎとか、色々ですね。悪魔とか、魔女とか。全く自分が描いた絵とそつくりのものを作つて並べてみたんですね。自分が分かる範疇や、好きなものを粘土で丸めて作つていたという感じなんです。その頃はもう、指紋が付いたのを磨くというのもしらない、着色もマニキュアでやったりと、従来の人形作りのハウ

ツーもわかりませんので、異常に奇怪だつたと思うんですけど、それをおもしろがつてくださった方が何人かいらつしやいまして、他の展覧会にもだんだんに誘つていただけるようになりました。

イギリスへ

■ やはり絵の方がやはり基本的な活動としてありだったのですね。

藤井 そうです。

■ それはもう、最初から絵をやるうと思つて？

藤井 そうですね。長くなるんですけど、小さいときによく好んでみていた絵本というのがデイズ二のイースターのお祭りのお話だったんです。年をとつた絵描きの鬼のおじいさんが旅に出て、貧しい寂しい村に立ち寄ると、おじいさんは枯れた芝生や朽ち果てた草木をきれいな色で塗つて自然豊かな村に変えていくというお話だったんです。イースターのお祭りの時に、鬼のおじいさんがゆで卵に色々な模様を描いて子供に配つて歩くというシーンがあつたんですが、その卵の柄のきれいが今でも頭に残っています。たまたま自分もカトリック系の幼稚園で、そのような楽しい思い出が残つていて、自分が大人になつて母になつたときに、子供と一緒に画用紙でお話を作りながら、絵を描いたりしてあげられたりしたらいいかなつて思つたのが、勉強をしよ

うとしたきつかけです。絵本に固執してしまつたので、立体での表現のイメージはありませんでした。たいそうに油絵、というわけでもなく、単純に子供と一緒に見られる身近に生きているような平面の世界というのがとても好きだったんです。それで好きで集めていた絵本がほとんどイギリスのだったので、イギリスに行つて勉強した方が一番早いかなって思つたんです。

■それは何歳の時ですか？

藤井 二十一歳の時です。

■何年間いらしていたんですか？

藤井 一年です。

■どんなところで勉強されたのですか？

藤井 トッテムハム・コートロードというところは電気屋さんと楽譜屋さんが多くて、半分が早稲田のような学生街なんです。その一角にカウンターがあつて専門別のスクールの案内が入つていて、それらは期間も短期から長期まで色々あつて自分で選べるんです。私はそこで三ヶ月で一単位で終了という美術系のコースを三つ受けてきたんです。そこは学校というよりゼミみたいで五、六人の生徒に先生が一人という感じでした。

■では、イギリスに行くまでは、どこで勉強するということも分らないで行つちやつたんですか？

藤井 絵を習いに行こうというのはありましたが、日本で調べていくというのはありませんで

した。だから家探しも現地です。すごい！

■藤井 それはね、こわいということすら知らなかつたんですね。高校の頃、好きでよく一人で神戸のユースホステルに行きましたが、それと変わらなかつたんです。たくましいいんでも男

■前にもイギリスのお話をうかがつたとき、迫力のあるエピソードがあつたんですが、キャベツ拾つて食べつないでらしたとか？

藤井 そうそう！（笑）迫力あるというか、すごく貧乏！（笑）

■苦学されていたんですか？

藤井 それは、苦学とか大変で、というのではなくて、お金を払わないで食べられるんなら、それで一食浮くという感覚で全然悲劇的じゃなかつたです。「学びの友」という留学生仲間がいて（笑）その男の子と一緒に、段ボールくささいって格好つけて言つて、その箱に店の裏にたまつたキャベツの外側の葉を詰めて持つて帰つたんですが、それも面白かつたです。ゲーム感覚で。かえつて年をとつた今の方がたかだかのことで大変大變つて、周りの人がうるさいと思うくらい騒ぐ！（笑）

■私もそうですね。（笑）

仕事の現場で

■藤井 我慢が出来なくなつていくのかしら。若いときの文句言わなかつた気がする。

■それは年をとると責任が伴つてくるからかもしれませんね。

藤井 そうかもしれませんね。私なんかNHKに行くと、鬼み

たいですよ、こわくて（笑）。もう、納得いかないことだらけで、あんなに腹が立てられる空気というの珍しい！こんな事

書かれるとおこられちゃうかもしれない！（笑）若いうちの自分がやりたい事って、多少道にそれたつてぶつかつて得るものがあつたと思うんですね。でも

年をとつてそうなると、得るものとは別の障害が生まれてしまふような気がする。憶測とか計算が無く接していても、相手が槍と盾や矛で身構えてしまふことってたくさんあるんですね。私、新劇の演出を見ているときに日本人の椅子の座り方と

欧米人の椅子の座り方が違ふって、椅子の座り方で注意を受けている俳優さんの姿を見ていたことがあるんですけど、椅子一つでもその国柄が出る。私もよくたえるんですけど、私

もよくたえるんですけど、私という音の形と、ケトルという音の形というのは違いますよね。レンガの積み方一つにしてもイギリス積み、フランス積みと違うんです。イギリスだけでも分かるようになります。楽しいかなって、勉強して帰つてき

て、仕事でイギリスのものを扱

うときに美術さんが知らなかつたので、知識のひけらかしではなくこういう形でですよ、つてお話をすると、相手は守りに入つてしまつて「あの人はうるさい」という。そして思いもよらないトラブルに巻き込まれて

いったりして、ものすごく疲れてしまふ。また、悲しいかな、男女の差もそこにありますね。同じ実力があるなら、男を雇うつて言われましたよ。人と人としての話がなかなかできないんです。どうしてなんでしょう

ね。男女平等を叫ぶリブとは違ふんですが、いいものを作りたいねという話をする前に、越えなければならぬ障害物がたくさんあつて……

■大きな組織ほどそういうのはあるのかもしれないですね。そういうお話を聞くと、いいものをつくらうという意思統一がされて無いたいみたいです。

藤井 いえ、個々にはあるんです。その中に若い人やこわいもの知らずの人がいて、新しい要素を入れていくことが出来るんでしよう。私もそういう人がいたから、知らない世界に紹介されてこにちは、と入つていくことが出来たんです。でも、「何も分からないから教えてください」と言つたとき、「お金払つて教えてやることなん

か出来ないよ」と言われたんです。そんな謙虚な挨拶すら受け付けてもらえませんでした。だから分からないときは聞くんです。ボンキッキで初めてアニメを担当したときも、たくさん

大切な作家

■よく路以さんとのお話で可淡さんの話題が出ますが、私は可淡さんとの関係はよく知らないんですが。

藤井 私はもう、可淡さんが大好きで。よくお話をしたりお茶を飲んだり。作品ももちろんですが、可淡さんって女の人のべたつとしたところがなくて、カラツとしていてというの

かな、たくましさや優しさ、酔の物のようなさっぱりしたところというのかな、自分のやりた

いことを意識して本当に大事にして持つている方、あこがれの的っていうのかな。年こそ下な

人です。でもお姉さんみたいな人。精神的にとつても頼れる方なんです。凛々しいんです。一人の女の人としても愛らし

かったり、面白かつたり。興味のある方だったんですね。生き方と作風でたくさんのことを教えてくださる方でした。心につもめる方だったものですか

ら、亡くなつた時は信じられなかつたです。仕事から帰ると主人（アガリエヒロム氏・舞踊家）に、大事な話があるから外の喫茶店で話をしようといわれ、何だろうと思つてついてい

くと、彼が気を落ちつけてね、と何回も言ってから可淡さんが亡くなったことを教えてくれたんです。私はその喫茶店で人目をはばからずおいおい泣きましました。

■やはり人形作家の中で路以さんにとって大事な存在は、可淡さんですか。

藤井 それと最初に、私の作品を面白いと言ってくださった吉田さんの言葉で救われたことかもしれませんね。吉田さんに誘われて二度、三度と展覧会に出すようになると、ある作家が毎日夜中の一時になると電話をかけてきて「あんなもの、引き上げる」と誹謗中傷するんです。私は自信もなく揺らいで不安定な時でしたので、吉田さんのそのあたりの言葉は本当にありがたかったです。そう吉田さんに言う、「路以さん、またゴマすって」と素直に聞いてくださらない。でも事実なんです。

■吉田さんも分かっていたら、しやるんじゃないですか。照れてるんじゃないですか。

藤井 そうでしょうか。それで、ちゃんと習ってみたいから、と吉田さんのお教室に行くと、それもまた習わなくていいって、入れてくださらないんですよ。そしたら可淡さんが後で、吉田さんは一人でやれる人は一人でやった方がいいという考えを大事になさっているから、って言うてくださったんです。また可淡さんが「路以さん、習わなかったからああいう

ものができたのかもしれないよ」って

■ああいうものって？

藤井 動物の人形とか。皆さん、人形イコール少女というイメージがありますよね、創作人形って特に。だからそれ以外のものっていう意味で。可淡さんも動物というのを自分のテーマにたくさんお持ちになっていた、私の漫画チックなものとは空気が全然違うと思うんですけど。

■どちらも良さはあると思いますが。

藤井 私の場合、いい人形というよりも、ブツで笑って見る人形という感覚があります。ただシニールな、絵画的なデカダンスのおいするものもものすごく好きなんです。映画のストリート・オブ・クロコダイルとか、名前は忘れましたが不思議の国のアリスで、兎が骨になって出てきたりするシニールなアニメとか。ものすごくああいうものが好きなのに、自分が作る段になるとコミカルになるんですね。自分に逆らってシニールなものを作りたいなと思ったりして悩んだ時期があるんですけど、これも、これが結果的に自分の個性かな、と逆らわなくなってきたんです。だから、今回の最新作も漫画チックなんです。

■でも、単なるコミカルとは違いますね。ある時、路以さんの猫の人形を見て可淡さんの作品と間違えた人がいたのですが、根本は全然違うじゃないって思います。

自分の表現を探して

藤井 私は自分でもよく分かりますが、全然違います。似てると言われたのがつらい、というのではなくて。私も彼女は憧れだから一度はそちらの方向に行ってみたいという欲があつて行くんですが、絶対そうならないんですね。それなら素直に自分の中で消化出来るものを栄養にしていっていいんじゃないかという、ちよつと居直りと、少し自分というのが分かってきたから変なところで欲を掻かずには落ちついてきたのかな、って。こういうものでもない、というのが絶えずあつたのです。が、今はこういう感じが作れたかったというものに近くなってきたという気がします。

■それは、方向性としてファンタジーということでしょうか。

藤井 そうです。あつちぶつかり、こつちぶつかりして歩いていく道の覚悟というのが出来たような気がしますね。迷ったけど、私はこの道だったんだって。チャップリンの言葉じゃないけど、「次に作る時が一番ベストなもの」というのがあるから、今のこれが一番、というわけにはいきませんが。ある作家の方でも、個展をする度苦しんでいるのがよく分かります。その人の方向でないものもやってしまったりする。でもそれがその人のいいところなんだなあ。ぶつかつて、こぶできて

ね。実際に大人であつても、子供の部分というのは個々にあつて、冒険もできるし失敗もできるし、ころんであざもできるし。迷つてわがままになったとき、たまたま人を巻き込んでしまふことが自分で分かっているんだつたらゴメンナサイで。

■真似の話ですけど、方向性として、誰々が大好き、ああいう世界を作りたいといつて、方向性として前の人がひいていってくれた道にちやつかりのつかつちやつてるといふのは、個展をやっている人だったら私は評価したくないんですよ。

藤井 すごく分かります。私も、他の作家の大好きな作品など手持ちにあるんですが、一切目に見えるところには置いていません。スズキコージさんという人のイラストも大好きで、直筆のものもあるんですが飾らずにしまいいこんで、画集のような感覚で取り出してみたいです。

自分の形をどういうものにしたいかというところに一番興味のあるといふ方は、自ずから自分の表現の仕方を探すしんどい旅にでるんじゃないですか？ 主人がよく音楽家の人と仕事をしますが、音符ってドレミファ・の限られた組み合わせの中で色々な曲を作るんですよ？ 作曲法という技術を会得すると、長調を短調に変えたり、テンポや編成を変えたりすることで従来あるものでも自分のおいをつけてフレッシュな

形で出せるという説明を受けたんです。すると作品というのそういうものかもしれないな、と。全く世の中になんかものを作るというのには不可能ですよ、この時代。情報のおかげで、知らないということが通らなくなつてきている。すると、自分が知つた以上、これも避けていかなきゃならない、あれも避けていかなきゃならないと、真似するつもりじゃなくてもどこか似てしまふということにもなつてしまふですよ。だから世の中になんかものを作ろうというふうなあまりにも大きな夢を描くのではなく、自分が何をしたいのかと問ひかけたときにこんなものをしたい、あんなものをしたいというのが一つも見つかったら大事にしていったら気がついて自分ものなんだというふうになればいい。

私はイギリスの古いものが好きで、人形の中にそのおいをつけたくて、イギリスのポルトベロの露店で買ったガラクタを実際付けていました。それは自分の好みの方向というものを嫌というほど体を持つのに、その時代に愛された形を自分にたたき込むのに必要なプロセスだったんじゃないかな、と思います。今はそれに似せたものを自分で作っています。その時代のおいする愛らしいボタンとかね、好きだから自分で作つたものも古くさせるという方法も身に付いてくるのです。だからポルトベロをうるうるしていたのが今は身に付いてい

るんです。作家はその道のもの
が好きなら、力があつたら絶対
無駄にはしませんよね。

これからのこと

■ 納得いく作品が一体できあ
がるまでのくらい時間がかか
りますか？

藤井 やっぱり一体1カ月です
ね。

■ すごいエネルギーですよ
ね。その過程で葛藤などはあり
ますか？

藤井 ありますよ、手足を作り
なおしたり。

■ 一番苦しかったり大変、たっ
たことは？

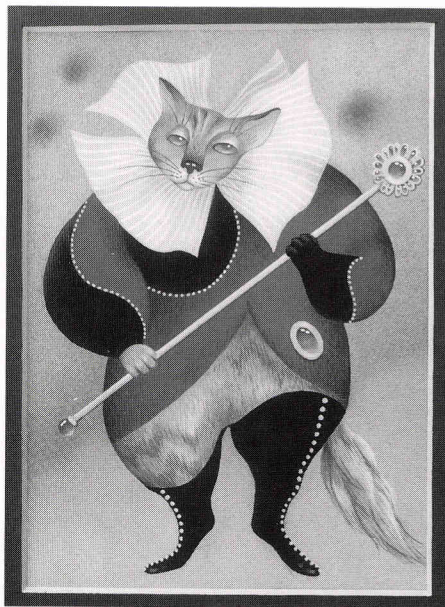
藤井 今回の作品はボーズ人形
(表紙作品) なんですけど、人形
が下っている木馬はあとからつ
けたもので、人形は人形として
立ち、木馬を下げて立つとい
うようにするバランスは計算づ
くではできないので、その曖昧
な誤差をどう処理するかという
ことが課題になってくる。それ
をまたどう創意工夫していくか
というのが楽しみです。

■ イメージは最初からかなり
明確ですか？

藤井 そうです
■ 今後の方向性としてどのよ
うに進められますか？

藤井 ボールジョイントの作品
は、今まで三年間テレビの仕事
が忙しいときは、部品として各
部分を作っていたので都合が
よかったです。だから、こう
いう(表紙作品の)ボーズ人形
は、関節人形とはかける時間が

雲泥の差なんですけど、まして、
ものを持たせていくと計算通り
にいかなくなつたところをあとか
ら工夫していかなければならな
いので、時間がとられるんです
よね。でも今はこういう形の方
が自分にとって興味があつて面
白くなつてきたのです。手間暇
かけて、苦勞をつらいな、とい
いながら楽しむという人形の作
り方を、テレビの仕事でさぼっ



イラスト・藤井路以

藤井 そうですね。あと、まだ打
診の段階なんですけど、すごく面
白い画廊が見つかったんです
ね。昔木造のアパートだったん
です。天井が梁のまま、漏電し
そうな昔の黒い電気コードが
張つて見える民家を改造した手
作りの画廊なんですけど、来年の
五月頃個展ができたらと思つて
います。それからテレビのプロ
デューサーが私の好きな本を選

ていた分罪滅ぼしというのか、
ここ二、三年は数は作れないと
思うんですが、一体一体自分な
りの時間をかけ創意工夫をして
みようという感じかな？たいそ
うな目標はないです。(笑) 一
体の人形に背景などのプラスア
ルフアを加えてみていた、だくよ
うなやり方で、私のいたずらな
ども含めた形の見ていただき
方を考えたいと思います。

■ このあいだのズッケロ(7
号で紹介) みたいな？

■ このあいだのズッケロ(7
号で紹介) みたいな？

藤井 でもね、たくさん涙流し
て、たくさん怒鳴つて、たくさ
ん喧嘩しないと、「川辺の仲間
たち」みたいなならないんです
よ。もう、正直言つて疲れて
…。でもこういう作品としての
人形は台詞もしゃべつてくれる
わけじゃない、動いてくれる
わけじゃない、音楽が入つてく
れるわけじゃない、ああいふ世
界って楽しい、私を待ちかまえ
てくれるワクワクするものが
いっぱいあるんですね。だか
ら、ひとつふたつ泣かされて
も、しんどいなって思つても、
やりたいって思いはやはり掻き
立てられるのでね、それできつ
と十三年もやってきたんだと
思うんです。でもそれがために
作品がおろそかになつてしま
うのでね、ちよつとしばらくは原
点に返つて何を一番大事に作
ていけばいいんだろうというこ
とに時間を費やしたいですね。

■ 最後になにかメッセージな
どありますか？

藤井 生徒にもよく言うのです
が、人形を作る方は誰かの真似
をしてきれいに仕上げるのな
ら、稚拙でもいいから自分らし
さを出して欲しいと思います
ね。稚拙であるという事は恥ず
かしいことではないのです。技
術的なことはあとからついてく
るのだから、そつなくこなすよ
りは、ちゃんやでも転んだとき
の膝の傷の痛さを感じていてく
れる方が嬉しいですね。作家に
なっていく方もいると思います
が、個々に大事にするものは違
うということをはかっています

しいんです。

藤井路以 略歴



- 一九五〇年 東京生まれ
- 一九七二年 イギリスに留学
- 翌年帰国後、サンリオくくるみ割り人形」の衣装を担当
- 一九八〇年 イラストレーション個展以後個展六回
- 一九八二年 講談社松本新人賞
- 一九八二年 ドイツ イラストレーショ
- ン展入賞
- 創作人形を手がけるようになり、展覧会に出展するようになる
- 一九八四年 フジテレビ ひらけポンキッ
- キの人形美術を担当
- 一九八六年 NHK 「いこうふしぎのく
- に」人形美術担当
- 一九八七年 NHK レギュラー番組「ピ
- コピコボ」人形美術担当
- 一九八四年 NHK レギュラー番組「マ
- ホマホ」では路以さんのこだわ
- りみいたいのものが、ずいぶん簡
- 単にすまされてしまったような
- 印象がありました。
- 一九八五年 NHK 「川辺のなかつた
- 美術担当

何でもあり、全てOK



気がつけば、私は二十年以上もの長い年月、人形を専門に文筆作業をしてきた。興味は他にもたくさんあったし、それについて書くこともできたのだけれど。人形専門誌はフリーのライターにとかく冷たいから、より一般向けなテーマの文を書いていた方がましだったかしら？

私はエジプトで五週間、スイスで一週間過ごし帰国したばかりだ。スイスでは友人の人形作家であるエリザベス・フルエラー・トマミケルと一緒に楽しく過ごした。チューリヒのエリザベスの家に着いた時、「ドール・フォーラム・ジャパン」の今号に一体何を書くつもりだったのかすっかり忘れていた。トイ・フェアーに関する何かだったとは思いつつ、もうそれは遙か昔のことのように思えた。そうしたらエリザベスがドイツ語の人形誌の最新号を持ち出してきて、その中の写真を見たとき、ん思いだしたのだ。私が今回書きたかったのは「文化の借用」だったということ。

作家や芸術家、人形作家は新しいテーマを探したり、なじみの深いテーマを斬新な感覚で捉えるという挑戦に向かい合う。また、作家の方向性は各人の興味や市場の要求に左右される。市場が国際的となった今、自分の国の人々だけが受け入れてくれるだけでは不十分だ。つまり、人形のテーマは

この狭い地球上のどこにでも存在し、新しい題材を求めて自国の歴史・文化伝統を越えた視野を持つ作家が増えつつある。

大勢の人形作家の作品が一同に集まるところといえば、トイ・フェアーやアメリカやヨーロッパのあちこちで開催される機会の多くなつた展覧会がある。流行を知るには都合がいいが、作家に直接質問できるチャンスは滅多にない。「どうして他のテーマでなくこのテーマを選んだの？」私はいつもこの点に興味があるのだ。

ベルギー在住のイギリス人、フィリップ・ヒースはアフリカやアジア人の見事なスカルプチュアを作る。ヒースはこのような人形をここ数年作っており、海外で旅行する際に撮る写真からアイディアを得ているという。作品にはいつも興奮するが、それ等が常にかつて見たことの無いような目新しい作品なので毎年毎年トイ・フェアーに足が向いてしまうのだ。私は驚かされる事が大好きだ！今回、ニューヨークランドから二人の作家が仲間を代表して数点の作品を出したが、なかでも二体の人形が二月のフェアーにあつた何百体という人形の中で際立っていた。二人の女性の一人はブルーデンス・ミラーという女性でマオリ族の成人した男性を丁寧に描写していた。顔の入れ墨は完璧に描写され、人形の男には品格が

あつた。私もマオリの人形を二体持っているが、おそらく一九三十年代のもので体は成人と子供の間ぐらい、いたってシンプルなので旅行者向けの土産物として売っていたものだ。ミラーの作品に比べれば素朴だが、それはそれなりに魅力的である。ミラーの人形でインディアンの人形で有名なNIA DA所属の作家、ジュン・グッドナウを思い出した。二人共、かつて人形という手法で写実的に描かれた事の無かつた祖国の民族、グループを表現しているからだ。より良い作品を作る為にリサーチを惜しまず、新しい技術も取り入れた。歴史に忠実であろうとしたし民族衣装も正確に作つた。又、彼らは人々を繊細に描く能力にたけていた。大変残念だが、文化を表現する際にいつもこのような結果が出るとは限らない。人形雑誌のページは民族や人種の違つた人形の広告で溢れてはいるが、顔の表情や色が違つたり、衣装も独自に作られてしまつたりしていることが多いのだ。

私が独創的だと思つたもう一人のニューヨークランドの作家はニコラ・ジャクソンだ。彼女は題材を探しに遙かメキシコまで旅したのだ！衝撃的な「マダム・カラベラ」はメキシコの「死者の日」を祝う日にあちこちで目にするが骨人形の一連であるが、彼女はそれより人形に近いものにする事で

自分独自の作品とした。そして人形の白黒をはっきり対照的に見せ、衣装の活気ある色使いで美的感覚を増した。勇気ある人形作家が民族芸術に息を吹き込んだのだ！

これとは異なるアプローチをとつたのがロシアのアレキサンドリア・クキノヴァだ。色彩豊かな十九世紀の衣装を着た布やビスクの民族人形でここ数年トイ・フェアアの注目を集め続けている。彼女は西ヨーロッパの文学に目を向け、有名な小説や詩に登場する人物を題材にドラマチックな作品を作つた。都心のプラザ・ホテルでは道化役者の素晴らしい一体物を展示していた。それは彼女らしいいつもの繊細な注意が配られながらも、初期のものとは全く異なつた作風だつた。常に完璧主義で彼女の人形を入れる箱でさえ賞に値する見事な芸術品である！

私のテーマにびつたりの人形作家がヨーロッパ、アメリカにまだまだたくさんいる。フランスのジャック・ドリエ、日本の歴史文化をヒントにした和紙人形を作るアメリカのダン・フレッチャーなどもその中の人々だ。大抵の人は、これを変つた試みと捉える事はしないだろう。ポール・ゴーンガンがフランスの田舎の風景や人々を描き、後に夕日に辿り着き現地の人々の暮らしをエキゾチックに描いたことと

人形気分

連載第三回

岩本さんの話

青山恵一



平田郷陽作 桃太郎

店にマックを買った。ハンバーガーのことではないと説明しなくとも、パソコンのある風景は、普通になった。設置する場所がないので、人形と一緒に並べてみたが、不思議と違和感がない、キーボードを見つめる和製ビスケットというの、愛らしい。

いづれは、ホームページも開きたいが、他にも、コンピュターがあれば、何でもできるというのが、昨今の風潮である。顧客のデータやニーズを管理すれば、販売にも活かせるというのが……

岩本さんが初めて私の店に見えたのは、もう十五年近くも前のことになる。小柄で地味な印象の女性客で、年令は、五十代半ば頃に見えた。

その日、岩本さんは遠慮がちに店内を見回して、廉価品の大正時代の抱き人形を一体買って帰られた。

その頃の私の仕事は、人形専門の古美術商であつたが、人形のお客さんと、ただ、それだけの話で終始するのが、物足りなかつた。せっかく人形達のお陰で知り合えたのだから、もっと色々な話もしたかつた。お酒も飲みたかつた。そんな動機が現在のカフェやギャラリー活動にもつながっているのだと思う。

そこで、「いろんな人と話してみたい」というタイトルを付けて、初めての企画を試みた。参加御自由、気に入りの人形の写真を一枚御持参くださいと、案内状も出した。当日の朝、どんな方々が見えるか楽しみに、その日のメニューである「ちらし寿司」の準備を始めたところへ、インターフォンが鳴った、岩本さんだつた。

岩本さんは、午後の閉店まで時間があるが、ゆつくり店の人形も見たいので、早めに来たと云つて、恐縮しながら、先日の人形の写真を見せてくれた。

ここで普段なら、岩本さんには、先日買って頂いた人形の次にふさわしい、価格や品を、お見せするのだが、その時の私には、「ちらし寿司」の方が気がかりだつた。

お相手できないがと詫びて、店の奥に案内した。そこには、先日仕入れたばかりの平田郷陽作の「桃太郎」が飾られていて、それは、当時でも小型乗用車一台分の価格がした。岩本さんは、一人で眺めた。

「集い」は、二十人近くの方々が集まつて、楽しいひとときを過ごすことが出来た。「ちらし寿司」も好評だつた。別れ際、岩本さんが近寄ってきたので、今日のお礼でも云われるのかと思つたら、「桃太郎」を買いたい、ということだつた。

数日後、岩本さんは、きつちりとお金を揃えて、人形を受け取りにやつて来た。その日初めて、男物のワイシャツを仕立てる仕事をしていること、戦争で新婚間もない夫を失くしたこと、郷陽さんの作になる桃太郎の「凛々しい」顔立ちがどこか、その人に似ていること等を、少し頬を紅らめて話してくれた。

岩本さんにお会いしたのは、その三回だけである。その後、幾度か案内状も差し上げたが、もう訪ねて来られることは、なかつた。「人の心の動きは、誰にも分からない」データとかニーズとかいう言葉を、私が信用しないのも、岩本さんの話があるからかもしれない。マックに出来ないこともある。(昔人形館青山店主)

（ゲイルからの手紙の続き）

同じように、「文化の借用」が皆さんの興味を引くのではないかと思つた理由の一つは、私の国には日本の作家には日本独特の作品を作つて欲しい、日本でも伝統を重んじる人はそうするに違いないという期待が存在するからだ。確かに日本の歴史は長く豊かで、今では数多くの人形製作技術があり無限の可能性を秘めている。それはドール・フォーラム・ジャパンのページを捲れば一目瞭然だ。だが日本以外の国々の人は、どこの国の作家もが楽しんでる表現の自由を日本の作家にも認めなければならぬ。日本の今昔をそのまま描写した人形に対するのと同様の敬意、情熱、興味をもって、彼らは日本人による異文化を借用した人形を迎えなければならないのだ。

ドール・パーティ・イン・カンサイ

文 小川千恵子

2月10日～24日

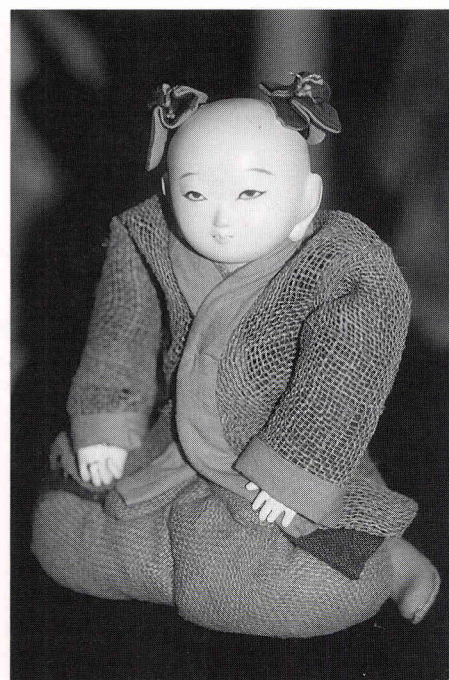
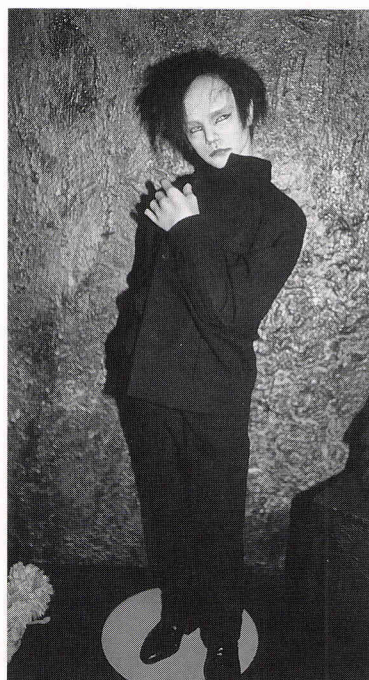
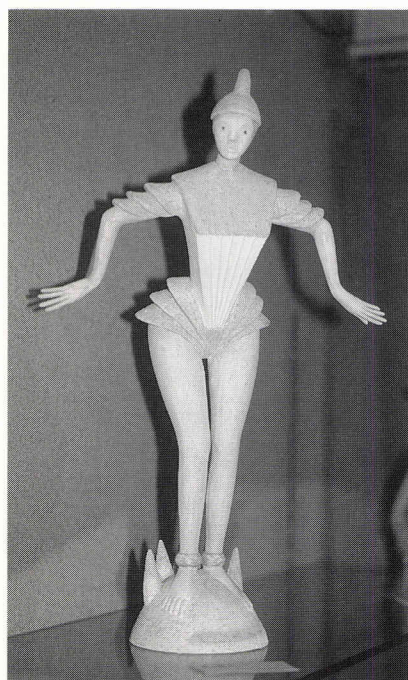
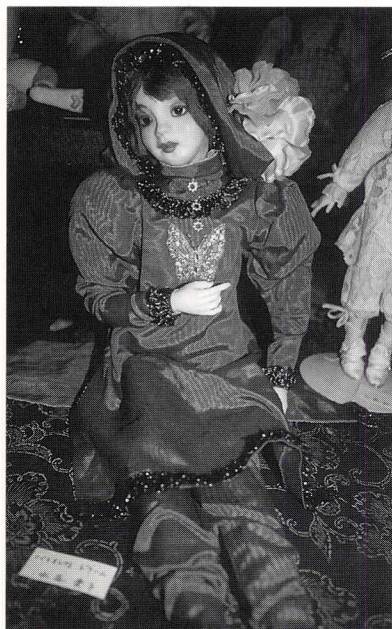
京都・昔人形館青山ギャラリーK1、大阪・游花舎

本誌に「人形気分」を好評連載中の青山恵一氏と、7号の表紙でご紹介した人形作家のたがわまさき氏の発案で、関西地区にスポットをあてたドール・パーティ・イン・カンサイが2月に開催された。昔人形館青山とそのギャラリーのオーナーでもある青山氏のコミュニケーションを大切に思う趣向と気配りにはいつも感心させられるが、今回もそのようなアイデアに富む楽しい内容となった。

展示は2月10日から24日まで、先着順に申し込みのあった20人の作家が、京都の青山氏のギャラリーと、大阪のたがわ氏の居酒屋ギャラリー「ゆうけ花舎」に一体ずつを展示した。展示には、関西だけではなく広島や九州から、また関東から参加する作家も少なくなく、幅広い作品が一堂に会し興味深かった。それぞれが個性的で完成度も高く、西日本の作家の底力を感じた。また、11日には游花舎でパーティを開催した。パーティでは展示をした多くの作家が参加し、こ

ういう会が少ないだけに参加者も期待に胸を弾ませて集まったようだ。一人ずつ作品を手により紹介を行い、アロマの香りの中で新進作曲家の山本有子さんの幻想的なピアノライブに魅了された。私もこの会にご招待に預かり、関東の作家の活動の様子などを報告、ドール・フォーラム・ジャパンの熱心な愛読者たちと直接交流することが出来た。お互い初対面の人も多く、西日本ではこれを機に新しいネットワークができたようである。それぞれが楽しく有意義に過ごせた会で、おなかもち

も一杯になった。これを企画し準備を整えて頂いた青山氏や、気取らずに味わいの深い手料理を、これまた凝った手作りの食器で、たっぷり出して下さったたがわ夫妻にも心から感謝したい。まずは、青山・たがわ両氏が、自分たちが楽しんでおいしい思いをしたいと発案したとのことで、今回の予定はないそうだが、今回参加できなくてとても残念がっているDFJ会員の声も届いている。1回で終わらずに、関西の「おもしろがり」の拠点となってくれば幸いである。



写真上段左：水谷愛子、右：游花舎の会場に集まった人達と
写真下段左：河野滋子、中：太山レミ、右：土井陽子

特別リポート

ひとがた・カラクリ・ロボット展

〇美術館（東京・品川区）

文・小川千恵子

このような企画展は、人形に携わるそれぞれの立場の者にとってとても貴重だった。やはり平田郷陽や山本福松、フォコン旧蔵のコレクション、グループ七彩のスーパーリアリズムのマネキンと、人形芸術史を語る上で必ず登場しながら実際になかなか見られないものの展示があることもあって、プロのベテランの作家が何度か足を運んだという話を聞いたのも、一人、二人ではない。

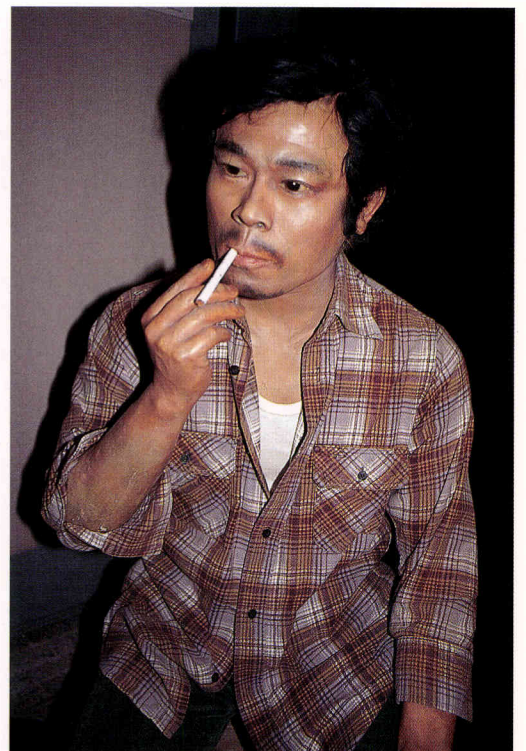
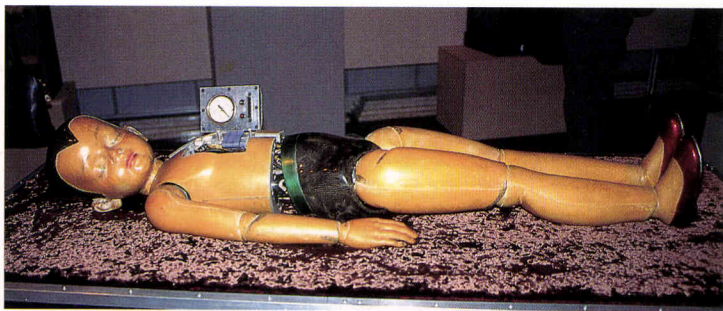
学芸員の天野氏が語るように、本来興行や実務のためにつくられたひとがたが、こうして美術館に陳列されることなど制作者は思いもつかなかっただろう。同企画はその希少性もさることながら、ユニークであったことは、先に述べたような歴史に残るひとがたから、アーティストによる人形やオブジェ、研究開発用の試作ロボット、コンピューターを取り組んだ新進アーティストの実験的な作品まで、一見脈絡もなく混沌とした内容が、ひとのかたちを唯一の共通項としているということで、ひとがたに対する観客自身の思索をそれぞれに促しているのではないかということである。

正直言って、自分の勉強・思索不足であることを認めた上での感想だが、私にとってはまだこの展示内容

を自分の中で系統立てて整理し直すことができない。芸術的価値観からひとがた史を見直すには、今回の内容は範囲が広すぎるのか、凝りすぎているのか、私にとっては、どこか物足りない印象が残ったのは確かである。パーティーションにより異なる日常レベルのステージが介在したような印象の会場で、ゆっくりと笑顔で這い回る等身大サラリーマン・ロボット「宮田二郎」に、それらを繋ぐ架け橋のごとき答えの意味を見いだしてしまうのは、読みすぎだろうか。

しかし敬服すべきは、天野氏の緻密なリサーチで、図録に収録された関連総合年表は、これから必ず重要な資料となるだろう。また視点も時代性に沿って改革的、というよりクリエイティブで、氏の斬新なコンセプトにより多くの芸術に関心ある若い人達が訪れたようである。

今回の企画を「創作人形批判であり、芸術批判であり、美術館批判である」と語る天野氏には、来号でDFJに記事を執筆していただく予定である。今回の企画を通しての氏の鋭い洞察を再び誌面で何うことができるのを、今から楽しみにしている。

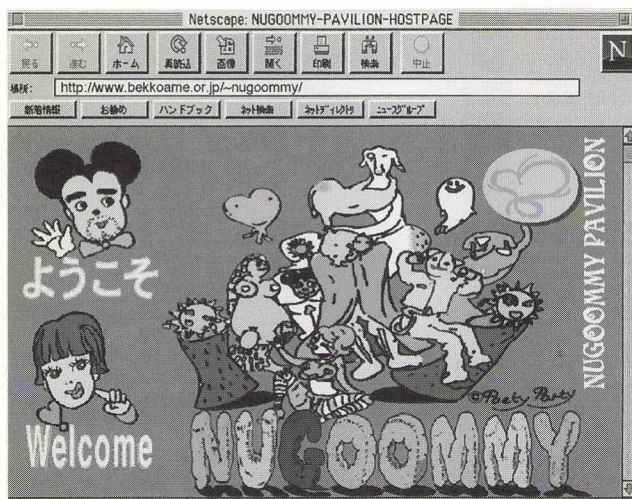


写真左上：荒木博士「ASTROBOY」、左下：太郎千恵蔵「プリンセス・パーティII」
写真右上：フランス製マネキン（フォコン旧蔵）、右中：鳥光桃代「宮田二郎」、右下グループ七彩

人形つれづれ

連載第九回

福島弘太郎



DFJ7号で紹介したポエティーパーティーがインターネットのホームページNUGOOMMY PAVILIONを開設しました。アクセスは<http://www.bekkoame.or.jp/~nugoommy/>

18

今年は寒い日が続いたせいか、この原稿を書いている四月中旬を過ぎてても未だ桜の花は散りきらず、その可憐な姿を枝のそちこちに留めているようです。いつも間際まで延ばし延ばしにしてしまう自分が悪いのは重々承知しているのですが、この締め切りさえなければ、今宵あたり最後の夜桜見物に絶好なのにと少しばかり恨めしい気分です。

私のこの筆無精は持つて生まれたものなのでしょう、元来の気の短さも手伝って、文字を通して伝えることがまだるっこしくて仕方ありません。「感じる」部分を言葉で言い表そうとすると、自分でも嫌になるくらい理屈っぽくて硬い言い回しになってしまいます。

しかし、この不精の本当の原因は何を隠そう、私の悪筆にあります。中学生の時など友達に出す年賀状をわざわざ書道のテキストから転写紙でコピーして笑われたこともあります。

ですからワープロが一般に出回り始めたときには真っ先に飛びつきました。これは文字がきれいに書けるだけでなく、読めるだけ

ども書けない漢字も出てくるし、ちよつと気障々たらしくて照れ臭いような文章でも不思議と何気に書けるのですから、私にとってまさに救いの神のようなものでした。

今ではワープロ専用機の代わりにパソコンを使っていますが、これを使い始めたときの感動はワープロの比ではありませんでした。私は主にワープロと帳簿管理、それに住所録くらいにしか使いませんが、お金に余裕さえあれば何しろ文字や表計算だけでなく、音楽や画像まで取り扱えるのですからこれはとても魅力的な機械です。

記憶媒体も買つてのテープからフロッピーディスク、そしてCDやMOとどんどん容量も大きくなり、取り扱える情報も豊富になりつつあります。先日発売された吉田良一さんのCDROM写真集「アナトミックドール」も以前発表された天野可憐さんの「カタンドール」同様好評なようで、同じ人形でも原稿の反射光で見るとモニターの透過光で見るとピュアな色彩の画像は少女達の透明感を強くアピールしているように

です。もはやコンピュータはオタクなオニイチャン達だけの遊び道具ではなくなりより広い層に受け入れられている、それでなくては伝えられない表現のメディアとして確立しつつあるという事が伺えます。

また最近話題になつていくようにパソコンは単に個人ユースの領域を越え、電話線を通じて世界にインターネットすることもできるようになってきました。とはいえこちらはまだ緒についたばかりで、システムもやっと整いつつあるといった段階ですが、いずれ近い将来、誰でも気軽にアクセスできるようになると思います。そして回線を使ったネット上での展示会や頒布会、また遠く離れた国の人達との合同展なども企画されるようになるでしょう。

いつでも居ながらにして全世界にアクセスできる簡便性と発信受信の両方出来る双方向性は、私たちが無意識に自身に課している発送の枠を大きく広げてくれる事になると思います。

今までは繊細な立体造形であるが故に限られた地域や状況でしか接することが

できないというハンデをおった人形が、映像という形ではあるにせよ、物という呪縛から解放された一つのメディアを通して自由により広範に触れられるわけですから、必ずや私たちの意識に何らかの揺さぶりを引き起こすでしょう。

バーチャルシティの中の人形店を覗いてみると、そこには各国の様々な素材や材料、それらを使うためのノウハウを載せた書籍やビデオが並び、また別の部屋ではみたい作家の最新作がいつでも展示してあります。またそれらは実際に購入することもでき、現実の世界で手に入れる事も可能です。—こんな話も決して遠い夢物語ではなくなると思います。

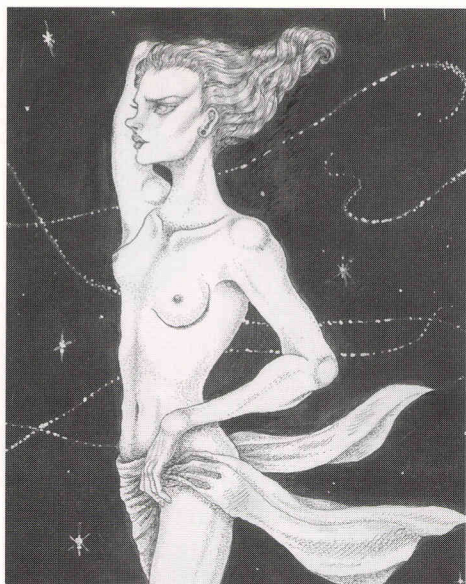
さて、今からでもまだ間に合いそうなので、これから散歩がてら今年最後の桜を見に行くことにいたします。静かになった公園の夜桜の下で、時にはこんな楽しい空想に耽るのも悪くないかもしれません。

(人形作家)

おばけ屋敷店長日記

第5回 嵐の中でキラキラ光る

文・イラスト 摩宮ピノン



今、レニチャンの事を思い出しています。レニチャンはフィリピン人のダンサーでした。この人との別れの日、「私、すぐに日本に戻ってくるよ！」とレニチャンは言い、再会をちかい合ったのですが…。

私は三年ほど前まで祐天寺の駅前でマーマレード・カンパニーというファンシーグッズの店を営っていました。私の描くイラストや作る人形のモデルの原型には、このお店で知り合った人がたくさん登場します。毎日のように来てくれる人も何人かいました。レニチャンもそんな一人でした。たくさんのフィリピン人のお友達を店に連れてきてくれたレニチャンとの最後の日は二人だけで静

かでした。「ああ、この人とはもう会うことは無いのだ」と強く感じました。一秒一秒がこんなにも大切で感じた事って有りませんでした。私はレニチャンに安物だけどハートのネックレスをプレゼントしました。レニチャンがお返しに踊ってくれたダンスは一生忘れません。本物のダンサーじゃないことは知っていました。が、その時彼女は私にとって間違いなく世界一のダンサーでした。

小学六年生のKちゃんはお母さんと弟の三人暮らし。世界のトップをきわめた父親ゆずりの鷹のように鋭い大きな大きな目は会う人すべてを引きつけます。ちよっぴりグレちゃんや、口の悪いKちゃんは、自分の生まれのことで悩んでいました。「私もお母さんみたいになるのかな」とつぶやいた時もありました。大人の身勝手な風に巻き込まれる子どもを何人も見てきました。Kちゃんもそうでした。

店をたたむ直前に嫌なことが続いた時、母の日を祝ってくれたKちゃん、子どものいない私にとつて最初で最後の母の日だったの

でしょう。母の日のプレゼントはお花とお店の大掃除でした。そして私のお店の最後のお客さんはこのKちゃんでした。どうもありがとう、Kちゃん！

日比混血のゆう君はママがパチンコを始めると店の前に走ってきて叫びます。「迷子だよ、迷子だよ、かわいそうな迷子だよ！」ゆう君を抱きしめると南国の香りがします。「ママなんか嫌いだ！おねえちゃんの子供になつてあげる」と言うのに、すぐに忘れちゃうの！

今日も明日もあさつても、とつてもひまそうな売れない口ツクのお兄ちゃん、パチンコ屋でバイトしてました。でも寒い日でも外回りの仕事を生き生きとやっているこの人には、しっかりと支えてくれそうな女神様みたいな奥さんがいました。

冬でも白いスーツのギンギンなヤクザのおじさん、でも話すとつてもテレ屋さんなんです。娘さんたちと家族そろつてきてくれたこともありました。

ああ、とつても書ききれない！この人たちをガルーダにしたいのです。東洋の

仏教の天使に。この人達は、皆真顔の時ちよつとかわしいまなざしをしています。きつと他の人より大きな嵐にあつてしまった人達で、人生の大波にのまれたときのガンバリが、ツツパリが、そして人間不信があつた強い目に残るんだと思います。

この人達から悪いことをする人がでたとしても、私はどうしてもその人が好きです。私の前で座り込み、自分のことを、将来のことを、今の不安感を話してくれたとき、一人一人がガルーダ（天使）でした。

： 本当はその子のことを最初に書かなくてはいいのかもしれない。でも、どうしても書けないのです。実は私の店は放火されて終わったのです。

人間不信！未だにどうしてもその子の本心が分からない。自分を情けなく、無力に感じています。だから、せめて手帳の片隅にこの言葉を書いて、見てはいる毎日なのです。

「嵐の中でキラキラ光る、その光のみ私は見ます」

行けなくて残念

会員の方から展览会のご案内を頂きながら伺えませんでした。ごめんなさい。またのご案内をお待ちしています。

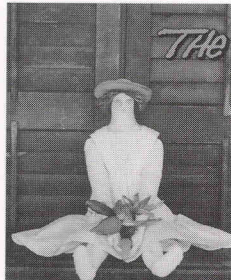
左から：

くる〜ぶ結布 第回人形展 (4/16~21 銀座)

原明子ソフト・スカルプチュア展

(4/17~29 富士見市)

飯塚誠太郎 二人展 (3/20~25 上尾市)



サンタフェ ドールアート

人形美の祭典

リポート 小川千恵子



去る4月18日から21日まで3日間、アメリカ・ニューメキシコ州のサンタフェで、現代ドールアートの祭典、第2回サンタフェ・ドールアートが開催された。アメリカ国内だけでなく、ヨーロッパからも参加者が目立ち、世界のドールアーティストの新たな交流の場として定着する様子である。

日本からは、ドールフォーラムジャパンを通して参加者を募集し、総勢13名の参加があった。ユーラシア・ドールズのブースでは、参加作家や日本からの委託作品を展示し、大変な好評を得た。「このブースを見ただけで来た甲斐があった」と喜んで下さる方も少なくなかった。参加作家の戸田和子さん、中西京子さん、福田朝子さん、稲辺智津子さんともに作品には感嘆の声が絶えなかった。この好評につき、主催者は来年、日本人作家の特別展示室を設けたい考えだという。

また、私も日本の作家の作品紹介を兼ねて、日本のドールアートの市場性と作品発表の方法について講義を行った。最終日の授賞式では、光栄にも今までの日本の作家紹介の仕事を認められ、同イベントの特別賞であるウィリアム・ワイリー賞を頂く名誉に預かった。

西洋の作家の作品には、いつもそのイマジネーションや表現のおおらかさ、温かさ、大胆さに感心する。日本人はすぐに表面的な完成度を気にする向きがあるが、こういう感性に学ぶものも多いのではないだろうか。ゲイル・ジマーのいうように、日本のドールアートを紹介することが窓ではなくて、ドアとなれることを目標にしたいものである。

来年のサンタフェ・ドールアートも同時期に開催、ドール・フォーラム・ジャパンでも今秋から冬にかけて参加者の募集を行う予定。



写真右中：受賞する筆者、左はピーター・コウ、右にジーン・ワイリーの両主催者に囲まれて

写真右下（左から）鯨恵寿、中西京子、戸田和子、ダン・フレッチャー、ピーター・コウ、筆者、稲辺智津子、福田朝子



FROM OVERSEAS

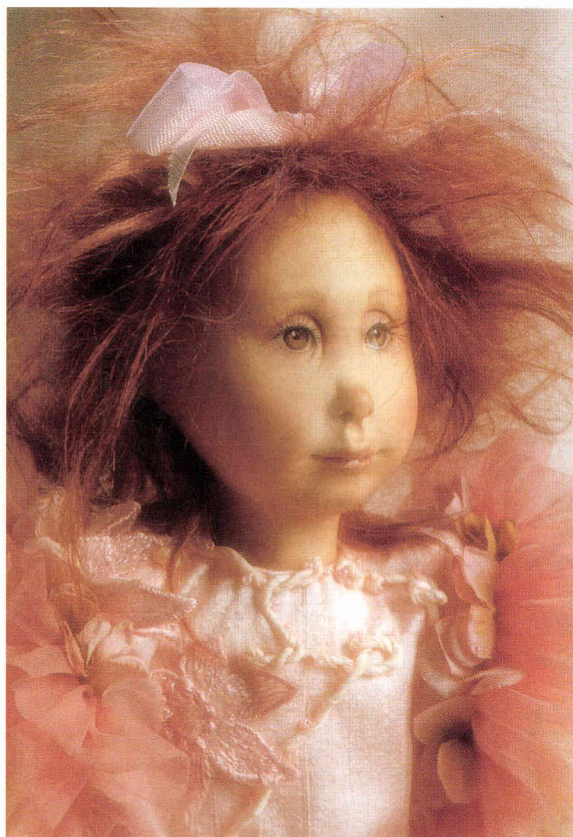
海外より

イヴォンヌ・フリプシ (オランダ)

とぼけた表情のファンタジックなネズミの人形でヨーロッパで人気を集めるフリプシ。

今号は偶然動物の人形の記事が重なった。それぞれのアイデアや個性が動物の人形にはよく反映されているようだ。

彼女はサンタフェ・ドールアートにも参加、オランダの人形界のパワーを見せてくれた。



こんにちは。私の名前は、イヴォンヌ・フリプシ。オランダから来ました。私は住民が3000人くらいしかない小さな町に住んでいます。とても静かな町で、私の家は海に面した堤防の後ろにあります。50メートルもいけば、小さな海岸に出ます。小さい頃は、大好きなものがたくさんありました。音楽、バレエ、演技等々。

私はずっとウォルト・ディズニーの漫画を描き続けています。私のねずみの子供たちは、ここから生まれてきたのかもしれませんが。

結婚するとすぐ、私はオランダの伝統的技法で絵を描き始めました。16年前、私の子供がとても小さかった頃、私はパン粘土で人の形を作って、売るようにになりました。自宅でもそれを教えるようになりました。

ベルギーのエッセンでの展覧会に行ったとき、とても美しい人形を見ました。その時、私は人形を作ってみたいと思ったのです。そして個人レッスンを受けました。使ったのは、空気乾燥の素材でした。今、私はフォルモや紙粘土を使っています。自然な色でロマンチックな形をつくることに力を入れています。1年間働いた後、私はハーグでの展覧会に行きました。そこで私は2位を頂いたことを誇りに思っています。8年前には自分で店を持ち、そこで人形などを売っています。すべて一体ものです。

4年前には、ヴィスバーデンのユーロドール展覧会で金賞を二つ頂きました。それからまたユーロドール展覧会のために制作をし、「オクトーバー」というファンタジードールが金賞を頂きました。踊るネズミもその翌年に賞をいただきました。

今や私の人形は世界中を旅しています。とにかく私の人生にとって重要なことは、仕事を楽しむこと、人形を作る喜びを感じ、人形に愛情をそそぎ込むことです。私のネズミの子供たちは、たくさんの私自身です。彼らと私は同じなのです。

イヴォンヌ

イラスト新連載

私の人形物語

その① 尋常でない人々

イラスト 波まり



* 前号で白石人形の蔵を紹介してくださった渋谷真理子さんに今号から連載をお願いしました。愛すべき人形好きのちよっと非日常的な日常の断片をユーモアこめて描きます。

さまざまな人形に対する、さまざまな見方、意見、それにさまざまな人形作家達……。これからの制作に勇気がわいてきます。小川さんの目線はあたたかさがあって、我々制作する者をはげまして下さる力があります。次の個展に向けてがんばります。小川さんのご活躍、ドール・フォーラム・ジャパンの発展をお祈りします。

東京都柏江市 小沢幹子

いつもかなりよく読んでいます。隅から隅までね。「フロム・オバーシーズ」が特に興味があります。人形の表情がね、日本の作家と一味違っているところが（人形のまわりで風が動く気分があるところが）オモシロイと思います。

先日○美術館の「ひとがた・カラクリ・ロボット展」で見た一九三〇年代のフランス製マネキンも、そういうところ。（ねえ、キミ）と気楽に声をかけなくなる微風がまわりにあって好きでした。

東京都北区 加藤暁子

いままでも「ぬいぐるみ」や「人形」は大好きだったけど、「創作・人形」について考えるようになったのはつい最近のことです。「いったいどこに行けば創作人形が見られるんだア！……」というのが、少し前までの夫の口癖でした。実は、この一歳年上の夫の方で、「人形」に燃えているのです。しかし、まだDFJを読み始めたばかりの私でも、小川さんのお仕事で大変だなあと感じます。しかし、よくぞこういう本を作った！と感心しています。載っている人形のレベルがどれも高く、充実しています。夫はホントに喜んでます！ぬいぐるみでも人形でも市販のものに満足できなくて、自分で作り始めたり、既成のものを改造したりしています。

DFJのインタビューコーナー……って。毎回、個性の強い（！）タイプも様々な作家さんと話をするのって色々苦勞があるのでしょうか。8号を読んでいて特にそう思いました。作家のプロとしての意識というか、ストレートな言葉の中に感じましたね。私が、インタビュを部分的に声を出して読むと、夫は「おおこの人はスゴイねえ、ものごと解ってんねえ」とえらいようなことを言っています。後の方の画商さんについての彼女の意見をみて……「ただの人」だとか「何も作っていない」という考え（意見）については……異議有りアリ。それぞれの役割があるわけで、「何も作っていない」「どこか流通させる仕事の人は、単に「お金」だけでなく、人と人との「出会い」とか「縁」も作っていると思うんです。モノを製造しても、流通がなかったらそのものは生かされないわけです。彼女は、人間として真

剣に生きてる人（だと思っし）そんないできる人格の持ち主なのだと思いますが、最後まで言いたい放題か！？という印象をもっていました。感情的な文章になっちゃってごめんなさい。正直な私の感想を述べさせてもらいました。

埼玉県坂戸市 葛西由理

さて、今回の八月号は何かと刺激的で、私も思うところがありましたので、ここに感想と意見を書いてみようと思います。

まず、大井要さんのインタビューが、良くも悪くも刺激となり、私はその内容について、強い共感と強い反感を感じました。今号の表紙を見た瞬間、私が快く感じなかったことも、大井さんの感性や考え方が自分と異なるのも、それは自然なことであって、仕方ないことだと思います。ですから、大井さんがシニールなものを嫌おうと、それもまた仕方のないことです。確かに私も「アートしてる自己満足」を嫌う感覚は共感できないわけではありませんが、ただ、えてしてこのように人には、自己満足云々以前にただただ「シニールなもの」に託された作家の精神性や主張を感じ取るための（まさに、そのための）リーダーを、たまたま持ちあわせていないがゆえに（あるいは関心がないがゆえに）余計に「シニールなもの」に疎外感を感じ、それを自己満足であるかのように思ってしまうという傾向があるように思われるのです。（そもそも、シニールなもの、グロテスクなものは、世界疎外を起す性質を持つものと考えられています。私がそのような傾向の人を知っていたら、さう思うのは「結局、あなたも自分の好みで判断している部分がある」ということと「貴女の嫌いな作品こそを好む人だっている」ということです。私はシニールなものも好きですし、自分が何らかの表現をするときは、そこに自己満足を求めることもありますが、そこには私自身も求められているものがある、自己満足のためのだけの作ろうとは思いません。このようなものを求める誰かがいると信じるからこそ作るといって一面がありま

す。しかし、かと言ってそれが万人受けするとは思いません。

（シニールレアリスタたちの）前衛芸術的表現が、他人に享受されにくいという性質を持つのは、否めないことで、そのために、時として、内的な、魂の部分が見落とされ「外見の異常性」だけを追求しているかのようにとらえられてしまうというケースも起こり得る。前衛的表現（特に抽象美術）自体が外的表現と内的表現との融合であり、しかも、前衛的表現における精神性が、特殊な次元（川の向こう側の世界？）に存するものであるために、一部の享受者には作品の中に精神性が見出せず、外的表現の奇抜さのみが目につくというわけです。このような誤解は、前回の投稿に書きまわした芝居に対する評価や感想の中にも、いくつか見られたものです。もちろん、技術や精神の未熟さも原因と考えるべきでしょう。しかし、また、自己の魂というべき部分は他人に理解されない宿命を負うという点も覚悟されるべきではないでしょうか。抽象芸術表現者は必ずしも、作品に魂を吹き込むことに対して無関心というわけではないのです。

それにしても、驚くべきことは、貴誌の中のそれぞれの記事が相互に、さりげなく、討論しており、全体として

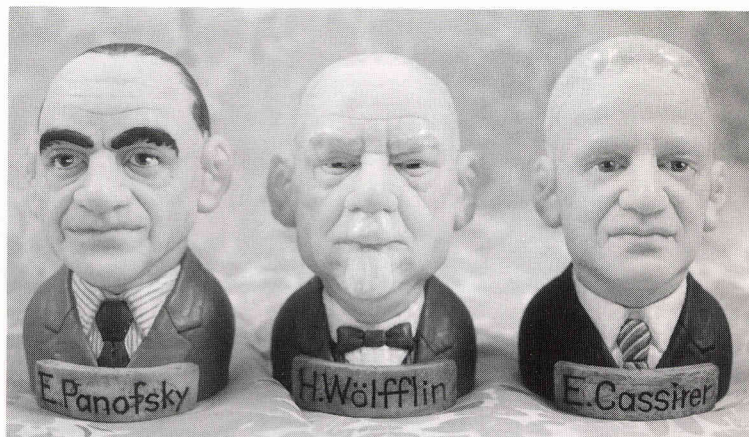
バランス良くできていることです。中立の立場の編集センスに敬服致しております。すでに次号が楽しみです。

京都府京都市 福田省吾

前略この度は、貴誌にご掲載いただき、光榮に存じます。仙台の渋谷様にも御礼申し上げたいと思っております。実は、渋谷様のご紹介は「別館」部分でございまして、「本館」の方については殆どふれられておりませんので、厚かましくも当方でPRさせていただきたいと思っております。本館の内容ですが、一階はおみやげ品コーナーがありまして、販売もしております。また、昭和二十年代、昭和五十年頃までの通称「ジャンク」と呼ばれるような、玩具や人形なども展示し、更に企画展示をするコーナーもございます。メーンは二階ですが、ここでは主として江戸時代から明治大正期の東北各地の土人形を千点くらい展示しています。仙台の「堤人形」米沢の「相良人形」その他の花巻人形、八橋人形、中山人形、鶴岡人形の古いものばかりです。また、節ごとに、企画展示を実施していますが、その際は、この二階部分がメーン会場となります。以上概略を申しあげましたが、当館は「百聞は一見にしかず」です。是非、機会がありましたらお立ち寄り下さい。

宮城県 白石・人形の蔵 館長 佐藤好一郎
宮城県白石市城北町四十八

電話 〇三三二四二六〇一四七五



はじめにお便りします。サーニットの講習会でノウハウを教えていただき、そのあと頼まれて作った三体組の胸像です。左から、エルヴィン・パノフスキー、ハインリッヒ・ヴュルフィン、アルンスト・カッシーラという美術史の偉い学者達です。本当に似ているんじゃないか、はて。サーニットは扱いなれると大変楽しく重宝な素材です。更に精進したいと思えます。DFJの活動は大変価値あるものだと思えます。

埼玉県柏市 藤沢卓子

■ 8号記事訂正のお知らせ
教室案内◆福田朝子人形教室の指導日 第二・三月木を、第一・三月木に ◆アートモマージュの月謝八千円を九千円に
◆原稿締切日を四月十日のところ三月十日と記載して関係者の方にはご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫び申し上げます

投稿募集

LETTERS/REVIEW 採用分にはリーセはがきセットを進呈
INFORMATION ニュースがあったらお知らせください
近況報告 プロの作家の新作発表の場です。審査有
教室案内 DFJ偶数号に掲載 写真返却不可
展覧会案内 随時受付 写真は後からでも結構です

■ 10号原稿締切 8月10日必着 (返却が必要な原稿は返却希望とお書き下さい)

■ 同封DM締切 9月1日 (枚数はお問い合わせください)

■ 10号発行予定 9月5日

ドール・フォーラム・ジャパンは年に4回3月・6月・9月12月に発行されます。初年度会費は5000円、継続会費は4500円です。

DFJ購読方法

ドール・フォーラム・ジャパンは書店では販売されていません。購読会員制ですので、下記のいずれかの方法で会費をご送金下さい。

郵便振替 00170 3 282796

「ドール・フォーラム・ジャパン」通信欄に「入会希望」とお書き下さい

現金書留 または 郵便小為替

バックナンバー

会員1部1000円 非会員1400円 (送料込)

5号 (後藤朝子)、6号 (四谷シモン)、7号 (たがわまさき)

8号 (大井要)

ドール・フォーラム・ジャパン第9号 1996年5月24日発行

編集発行 ドール・フォーラム・ジャパン事務局

〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57 ☎ 0423-95-7547 FAX 0423-95-7975

編集責任者 小川千恵子

印刷 株式会社 日出島

ドール・フォーラム・ジャパンはユーラシア・ドールズのスポンサーシップにより運営されています

編集後記

◆ 今号はニュースが一杯、いかがでしたでしょうか？前号では大井要さんの歯に衣させぬ痛快な論調に賛否両論、ご意見からお手紙までたくさん頂きました。「あそこまでいわずに…」という意見から、「私とまったく同じ事を考えている」「彼女の意見は耳に痛いけど、真実だ」など。投稿欄のお手紙にもそれぞれにお答えしたかったのですが、時間と誌面の少なさ故、ここで端折っておくたえすることをお許し下さい。まず、葛西さんへ、私はインタビューで精神的苦痛を感じたことはありませんのでご安心下さい。心配して下さいありがとうございます。私はかえって、皆さんの代表として作家と直に色々な話をする事が出来るので、どのような発言にあっても贅沢な思いをさせてもらっていると思っております。福田さんへ、ていねいな長いお手紙をどうもありがとうございます (掲載文は一部です)。確かに一般にシュールなものに対する偏見はあるかもしれませんが、そういう意味であなたのご指摘は正しいと思います。大井さんがどのようにお考えになるか分かりませんが、私に関して言えばシュールな表現をするだけの必然性がよく理解できずに戸惑うことが多いのは確かです。表現の説得力の問題 なのでしょうか。またいつかゆっくり考えてみたい課題です。

◆ さる4月10日にチャットを渋谷でしました。連絡の悪さで関心のあるみなさまにご迷惑をおかけして申し訳ありません。6月から一応予定していますのでご興味のある方は別紙のお知らせをごらんの上お越し下さい。お会いできるのを楽しみにしています。

ドール・フォーラム・ジャパン編集事務局 小川千恵子



ミワ・ドール限定モデル

ボンボンベビーとうさぎベビー

少女の夢を形にしたような三輪輝子デザインのビスクドールをDFJ会員に特別にご紹介いたします
共に 29cm 素材：ビスク（顔・手・足）、クロスボディ、プラスチックビーズ、髪：化繊

DFJ会員特別提供価格：ボンボンベビー（左） 23400 円（一般小売価格 26000 円）
うさぎベビー（右） 23400 円（一般小売価格 26000 円）



現代人形初めての名鑑

GRAPHIC

クラフトアート人形篇

マリア書房

7800 円

DFJ 会員には送料（520 円）をサービス

全国216人の現代人形作家の作家の最近作を、ジャンルを
越え一人1頁フルカラーで紹介。

略歴・コメントも掲載

お求めにはDFJ会員用のお申し込み用紙をご利用になるか、電話でお申し込みください（会員番号をお告げください）。

EURASIA DOLLS

ユーラシア・ドールズ 189 東京都東村山市久米川町3-27-57
tel 0423-95-7547 fax 0423-95-7975